

Pascal と Luis de Granada

前田長太訳『パスカル感想録』解題補遺

広田昌義

*

『言語文化』第九号(1972年)に、Blaise Pascal の《Pensées》の最初の邦訳書と考えられる、前田長太訳『パスカル感想録』(大正三年、洛陽堂刊)についての紹介を試みた⁽¹⁾際、同書に収められている、「西班牙パスカルの人生観」なる小篇の原典を、16世紀スペインの宗教思想家 Luis de Granada (フランス風には Louis de Grenade) (1505-1588) の《Guia de Pecadores 罪人の導き》であると記したが、その後の調査によってこれが誤りであって、じつは同じ著者による《Libro de la oracion y meditacion 祈禱と黙想の書》(1567年 Salamanca で初版が刊行)であることが判明したので、お詫びとともに訂正しておきたい⁽²⁾。

問題の小篇は、前田長太訳『パスカル感想録』の六九頁から九三頁までに訳載されており、「西班牙パスカルの人生観」という題名の後に、《古来パスカルの人生観と並び稱せらるゝものは、彼の西班牙のパスカルと稱せらるゝ哲人(グルナード)の人生観なり、此の二人の人生観は相俟ち相扶けて、各々其意を補うものなれば、茲に掲げて読者の参考に供せんと欲す。(譯者)》という断り書きがあって、次に、《序論》、《一 人生の出所》、《二 人生の短僅》、《三 人生の無常》、《四 人生

の脆弱》、《五 人生の轉變》、《六 人生の虚偽》、《七 人生の苦難》、《八 人生の終局》、《結論》の十項目が置かれているのである。これは、Luis de Granada: Libro de la oracion y meditacion⁽³⁾, parte I, Capitulo IX. にある《El mártir en la noche 火曜日夜[の黙想]》の部分の抄訳であるが、この部分は、まず導入部があり、それに続いて、⁽⁴⁾ (§. VI.) 《De la consideracion de las miserias de la vida humana; en el cual se declara mas por extenso la meditacion pasada. 人生の悲惨についての考察。ここにおいて上記の[導入部の]黙想がより長く説かれる》と題された序論があり、その次に、 (§. VII) 《De las miserias y condiciones desta vida; y primero de la brevedad della. この世の生の悲惨と現状。そして、第一に生の短さについて》という項目の標題があり、数行の端書きによって、以下人生の悲惨を、その短さ、無常、脆弱、轉變、虚偽、苦難、死の七項に分けて論ずることが明らかにされて、《PRIMERA MISERIA 第一の悲惨》として、人生がいかに短いものであるかが論じられている。次いで、 (§. VIII) 《De cómo es incierta nuestra vida. II MISERIA われわれの生がいかに無常であるかについて。第二の悲惨》、 (§. IX.) 《De cuán frágil sea nuestra vida. III MISERIA. われわれの生がいかに脆弱であるかに

ついて。第三の悲惨》, §. X. 《De cuán mudable sea nuestra vida. IV MISERIA. われわれの生がいかに転変しやすいかについて。第四の悲惨》, (§. XI.) 《De cómo es engañosa nuestra vida. V MISERIA. われわれの生がいかに虚偽であるかについて。第五の悲惨》, (§. XII.) 《De cuán miserable sea nuestra vida. VI MISERIA. われわれの生がいかに苦難の多いものであるか。第六の悲惨》, (§. XIII.) 《De la última de las miserias humanas, que es la muerte. VII MISERIA. 人間の終局の悲惨である死について。第七の悲惨》の各項目が続き、最後に、

(§. XIV.) 《Del fruto que se saca destas consideraciones susodichas. 以上の黙想からひき出される結果について》という結論があって、《火曜日夜 [の黙想]》の部は終るのである。

前田長太は以上の部分のテキストを三分の二ほどに抄訳しているのであるが、構成に幾分かの変更を加えている。すなわち、前田長太訳における《序論》は、 (§. VI.) 《De la consideracion de las miserias de la vida humana [...]》から冒頭の一節を、《El mártres en la noche》の導入部から末尾の一節を、 (§. VII.) 《De las miserias y con-

「西班牙バスカルの人生観」(前田長太訳)『バスカル感想録』六九頁一九三頁。	Luis de Granada: Libro de la oracion y meditation, Parte I, Capitulo IX, 《El mártres en la noche》. (Obras del V. P. M. Fray Luis de Granada. Tomo 2 (Biblioteca de autores españoles, tomo 8, Madrid, Real Academia Española, 1945.), pp. 25-33).
序 論	(§. VI.) 《De las consideracion [...]》の冒頭の一節, 《El mártres en la noche》の導入部末尾の一節, (§. VII.) 《De las miserias [...]》の端書の末尾。
一 人生の出所	(§. VI.) 《De la consideracion [...]》の抄訳。
二 人生の短僅	(§. VII.) 《De las miserias [...] y primero de la brevedad [...] PRIMERA MISERIA》の抄訳。
三 人生の無常	(§. VIII.) 《De cómo es incierta [...] II MISERIA》の抄訳。
四 人生の脆弱	(§. IX.) 《De cuán frágil [...] III MISERIA》の抄訳。
五 人生の転變	(§. X.) 《De cuán mudable [...] IV MISERIA》
六 人生の虚偽	(§. XI.) 《De cómo es engañosa [...] V MISERIA》の抄訳。
七 人生の苦難	(§. XII.) 《De cuán miserable [...] VI MISERIA》の抄訳。
八 人生の終局	(§. XIII.) 《De la última de las miserias [...] VII MISERIA》の抄訳。
九 結 論	(§. XIV.) 《Del fruto [...]》の抄訳

diciones desta vida [...]》から冒頭の端書の一部をそれぞれ抜き出してつくりあげたものである。また《一 人生の出所》は (§. VI.) 《De la consideracion de las miserias de la vida humana [...]》の抄訳であって、これを人生の悲惨の項目に新たに加えたために、原典においては人生の悲惨が七つの項目に分たれているのに対して、前田長太訳においては、八つの項目に分たれることになった。

以上の対照を表にすれば前頁のようになる。

さて、以上のように「西班牙バスカルの人生観」が Luis de Granada の《Libro de la oracion y meditacion》の一部を抄訳したものであることは明らかになったが、前田長太が直接スペイン語の原文に拠って翻訳をおこなったかという点になると、これはきわめて疑わしい。前田長太が、ラテン語とフランス語には造詣が深かったことは知られているが、スペイン語を習得していたという事実は伝えられていない。それに「西班牙バスカルの人生観」について、前田長太は、《哲人（グルナード）の人生観なり》と書いており、Luis de Granada の名前を Louis de Grenade というフランス風の読み方で表記しているのであるから、翻訳はフランス語訳のテキストに準拠していると考えるのが妥当であろう。のみならず、前田長太は Luis de Granada についても《Libro de la oracion y meditacion》についても何の説明もしていないところから見ると、フランス語による何らかの選文集が翻訳のテキストとなっていたのではないかと想像できる。Luis de Granada を《西班牙のバスカルと稱せらる》と書いているのも、選文集の解説によっているのではなからうか。現在までのところ筆者は《Libro de la oracion y meditacion》のフランス語訳を四種類⁽⁵⁾披見しえたが、釈然とすることがない。博雅の士の御教示に俟ちたいと思う。

*

《Libro de la oracion y meditacion》のフランス語訳で、筆者が調べることができたもののひとつに、F. de Belleforest によって翻訳され、1602年にパリで刊行された《Traité de l'oraison et méditation》⁽⁶⁾がある。刊行年から言って、Pascal 自身も手にすることが可能であった書物だが、その当該箇所 (folio 91-droite から folio 110-gauche までが、上で問題にした《El mártres en la noche》[仏訳では Pour le mardi au soir]の部分に当る) を読んでみると、《Pensées》のいくつかの断章との関係で、興味を惹かれる点が見出される。以下に三点にしぼって述べておきたい。

1. 《考える葦》 Pascal の《Pensées》のなかでも最も有名な断章のひとつに、いわゆる《Roseau pensant》がある。これは、自然界における人間の矮小さと脆弱さを一本の葦の比喻によって表現し、そのような人間存在が自然（あるいは宇宙）に対してもつ優越性が意識と思考の力とにあることを主張した断章である。この断章の冒頭部、すなわち、

《L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant. Il ne faut pas que l'univers entier s'arme pour l'écraser; une vapeur, une goutte d'eau suffit pour le tuer.

人間は一本の葦である。自然のなかで最もか弱いものである。しかしそれは考える葦である。それを押し潰すのに宇宙全体が武装する必要はない。ひとつの蒸気、一滴の水でそれを殺すのに充分である》(L 200-B. 347)⁽⁷⁾

という箇所については、従来 Montaigne の《Essais》Liv. II, chap. 12 《Apologie de Raymond Sebond》の次のような文章が Pascal の発想の源にあったのではないかと考えられている。ひとつは、Sainte-Beuve がその著《Port-Royal》(Liv. III) に引用している次の一節である。

《Quant à la force, il n'est animal au monde en butte de tant d'offences, que l'homme: il ne nous faut point une baleine, un éléphant, et un crocodile, ny tels autres animaux, desquels un seul est capable de deffaire un grand nombre d'hommes; les poulx sont suffisans pour faire vacquer la dictature de Sylla: c'est le déjeuner d'un petit vers, que le cœur et la vie d'un grand et triomphant Empreur.

力ということになると世の中に人間ほど多くの攻撃にさらされている動物はない。鯨とか、象とか、鰐とか、その他の、ひとりてたくさんの人間を殺すことのできる動物をまつまでもない。虱はスルラに最高指揮官の職を辞めさせるだけの力があつた。偉大な勝ち誇った皇帝の心臓や生命も、小さな蛆虫の朝飯にすぎない。(原二郎訳) (Ed. Villey-Saulnier, p. 462)

また、Brunschvicg は、その《Pensées》の édition に注として、《Essais》の同じ章から次の文章を引いている。

《C'est toujours l'homme foible, calamiteux et misérable [...] un souffle de vent contraire [...] un signe, une brouée matinière; suffisent à le renverser et porter par terre.

ひっきょう、か弱い、不幸な、惨めな人間なのだ。[...] 一陣の風 [...] 一つ

の兆候、朝霧が、人間を地上に打ち倒すのには十分なのだ [...]》。(Ed. Villey-Saulnier, p. 475)

この二つの文章と、先に挙げた Pascal の文章とを比べると、確かに内容的には似通っており、共通の単語や言い廻しも認められるのであって、《Pensées》の他の多くの断章の場合と同じように、Montaigne の《Essais》を源泉とみなしてよいと考えられる。ただし、Montaigne の文章には、《roseau 葦》という単語が現われていないが、この点についても、前田陽一教授に卓抜な考究がある⁽¹⁰⁾。前田陽一教授は、《勿論、葦を弱いものの象徴とすること夫自身には少しも不思議はなく、パスカルと同時代のラ・フォンテーヌがイソップの寓話を詩にした快心の作『樗と葦』(『寓話詩』第一部第二二、一六六八年発表)に於いても似た様な意味に用ひられてゐる。然しパスカルが特にこれを取上げたのには何か深い理由がある様に思へてならない。[...] パスカルは聖書よりヒントを得たのではないかと思はれる。パスカルが聖書を如何に日夜精読したかは、姉のペリエ夫人が、「彼はそれにあまり強く熱中したので、遂に殆ど全部を暗記するに至った」[...] と記してゐるのを見ても明らかである」と述べて、《聖書の中に於いて葦と云ふ語は何回か使用されてゐるが、特に左の様な注目すべき用例がある》として、『イザヤ書』第四二章に、《かれは叫ぶことなく、聲をあぐることなく、その聲を街頭にきこえしめず。また傷める蘆を折ることなく、ほのくらしき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん》という条りに注目し、これがキリストの生涯の予言としてきわめて驚くべきものであり、マタイ福音書もこの条りを引用していることに触れて、《基督に関する豫言をその護教論の主要論據の一つとしてゐたパスカルが此句に注目しなかつた譯は

なく、又興味あることには […] バスカルが平生用ひたとされてゐるルーヴァン大学の神学者の佛語譯聖書に於いては、傍點を附した個所は *ne brisera pas le roseau cassé* と譯されて居り、「考へる葦 (roseau pensant)」の「葦 (roseau)」と正に同じ字が用いられてゐる」と指摘している。そして、結論として、《即ち、「傷める葦」を折ることなき」基督あってこそ、「考へる葦」の尊嚴が確立された》のであると述べている。これは《葦》の比喩の源泉に関する議論としては、その明快さにおいても、その深さにおいても、決定的なものであろう。

以上のように、《考へる葦》の断章については、Montaigne の《Essais》と聖書とに、発想の源泉を求めることができるのであるが、われわれが問題にしている Luis de Granada⁽¹¹⁾ の著作の仏訳本においても、《考へる葦》の断章で述べられている人間存在の脆弱さについて、次のように表現されているのである。

《Considère donc […] combien fragile et aisée à rompre est cette vie, et verras qu'il n'y a vaisseau de verre si délicat qu'elle est, ni si tendre à être cassé: puisqu'un peu d'air, un peu de chaleur de soleil, un verre d'eau froide, une haleine d'un malade suffit pour nous dépouiller de cette vie, ainsi que l'expérience nous le fait voir tous les jours en plusieurs personnes, […]》。

それゆえ、この生がいかに脆弱であり、碎けやすいものであるかを考察せよ、そうすれば、この生ほど傷つきやすく、毀れやすい器はないことが分るのであろう。なぜならば少しの風が、少しの日光の熱が、一杯の冷水が、病人の吐く息ひとつが、われわれをこの生から引き離してしまうのに充分なのであって、そのことは経験によって常日頃われわれが何人も

の人において見ていることなのである […]》(Louis de Grenade: *Traité de l'oraison et méditation*, trad. par François de Belleforest, 1607. fol. 93-gauche)

《[…] dis-moi, quel verre est plus tendre et facile à casser que la vie de l'homme: un peu de vent suffit souvent pour nous faire mourir, un peu de serein, ou de Soleil trop violent est pour nous dépouiller de la vie Mais que dis-je le Soleil? puis que le seul regard d'un homme souvent cause la mort d'une créature et ne faut armes ni bâton, puisque l'œil seul peut occire. […]》

言い給え、人間の生よりも毀れやすいようなガラスはどのようなものか。少しの風でしばしばわれわれが殺されるのに充分なのだ、少しの露で、あるいは強すぎる少しの日射でわれわれが生を奪われるのに充分なのだ。それにしても日射とは大きさではないか? なぜなら、一人の人間の視線だけで被造物の死がひき起されることがしばしばあり、武装も棒具も必要ではない、なぜなら眼だけで殺することができるからである》(ibid, fol. 101-gauche)

この二つの文章とすでに引用した Montaigne の文章のどちらが Pascal の《考へる葦》冒頭部により大きな類縁性をもつのかは、一概に決めるにくだらう。しかし、きわめて興味が惹かれる文章が、もうひとつ見出されるのである。それは、人間が泥土によって造られていることが、人間の卑賤さを示していると述べられている部分にある、次のような一節である。

《Entre tous les éléments, la terre est la plus basse et ès parties d'icelle,

la bouë est la plus vile, et ainsi appert-il que Dieu a créé l'homme de la plus abjecte et moins valant chose du monde. Tellement que les Papes, les Empereurs, et les Rois, quelques grands que puissent être, si ne sont-ils autre chose que poudre et cendre, et ceci était bien entendu jadis par les Egyptiens, desquels est écrit que célébrants tous les ans la fête de leur naissance, ils portaient en leur main certaines herbes qui croissent és mares, lesquelles sont toutes limoneuses, pour signifier la ressemblance que les hommes ont avec la paille, et la bouë qui est le père commun de l'un et de l'autre.

一切の元素のなかで、土は最も位の低いものであり、そのなかでも泥土は最も下賤なものであり、それゆえ神が人間をもっとも卑しく最も無価値のものによって造られたことは明白である。従って、教皇、皇帝、国王がいかに偉大であるといえども、埃と灰以外のものではない。そしてこのことはかつてエジプト人に知られていたことであって、伝えられるところによれば、エジプト人は毎年誕生日を祝うために、沼地に生えて泥だらけの或る草を手にもつことにしていたのであって、それは人間たちが藁のようなものであり、双方の生みの親である泥のようなものであることを示すためであった》(ibid., fol 95-droite)

ここで言われている《certaines herbes qui croissent és mares 沼地に生える或る草》、泥だらけであって、エジプト人が人間の象徴として誕生日に手にしたという植物は、《葦 roseau》であると考えるのが自然であろう。17世紀のフランス語辞典、Furetière: Dictionnaire universelle の《roseau》の項も、まず《Plante marécageuse 沼地の植物》

という定義を与えているのであって、⁽¹²⁾ エジプトの沼地に生える植物と言えば、17世紀のフランス人にとっても、まず葦が連想されたはずである。その上、テキストに《paille》という単語が出てくるとも注意される必要がある。《paille》は一応《藁》と訳しておいたが、背の高い草類の茎を乾かしたものの一般を言うのである。葦が長い茎をもち、従ってどこか人間を思わせるところがあり、そこから、人間の比喩として用いられることになったのであるから、《paille》となりうるような茎をもちエジプトの沼地に生える植物としては葦以外のものは考えにくいであろう。

Belleforest 訳の《Louis de Grenade: Traité de l'oraison et méditation》の《火曜日夜 [の黙想]》の部分は、folio 92 から folio 110 までの僅か三六頁に過ぎないが、そのなかに相互に近接して上に引用したような文章が見られることから、Belleforest 訳のこの部分と Pascal の《考える葦》の断章との間に何かの関係を想像してみたいのである。

エジプト人の《沼地に生える》葦についての一節は、Belleforest 訳では、《Second traité de la considération des miseres de la vie humaine: auquel est déclarée plus amplement la susdite meditation》の項(原典の §. VI. 当る項)に置かれており、そこでは問題の葦が人間の卑賤さの象徴としてとりあげられているのであるから、もし Pascal がこの一節を読んだとするならば、《Pensées》の《考える葦》も、単に人間の脆弱さの象徴だけではなく、人間の卑賤さをも表わしているということになるかもしれない。

2. 《生の短さ》《Pensées》に次のような短い断章がある。

《Entre nous et l'enfer ou le ciel il

n'y a que la vie entre deux qui est la chose du monde la plus fragile.

われわれと地獄あるいは天国との間には、この上なく脆弱な生があるだけだ》(L. 152-B. 213)

この Pascal の文章とよく似た表現が、Belleforest 訳の《Traité de l'oraison et méditation》の問題の部分に見出される。

《…ces malheureux qui vivent si longtemps en péché, sachant qu'entre eux et l'enfer il n'y a rien que cette faible et misérable vie.

彼らと地獄の間にはこのたよりなく悲惨な生以外には何もないことを知りつつ、あれほど長い間罪のうちに生活している不幸な人びと》(op. cit., fol. 102-droite)

いずれも短い文章であるから、そこには単なる偶然から生じた語句上の相似があるだけだと考えることも勿論できるかもしれない。しかし、上の Pascal の断章の《Pensées》における位置と、Luis de Granada の文章が置かれている《Traité de l'oraison et méditation》の部分には、大きな共通点がある。すなわち、上に引いた《Pensées》の断章 L. 152-B. 213 は、Pascal 自身が作成した《はじまり Commencement》という綴り liasse に含まれているのだが、この綴りは有名な《賭 pari》の断章とも内容的連関があり、そこに収められている諸断章は、人間の現世的生は死後に得られるべき永遠の幸福あるいは不幸と比べるならばほとんど無に等しいことを説き、宗教に無関心な態度を棄てて神の探究へと向うように決断を促しているのである。死後の運命に無関心な人間を、この綴りに収められている二つの断章は、次のように描写している。

《Nous courons sans souci dans le précipice après que nous avons mis

quelque chose devant nous pour nous empêcher de le voir.

われわれは断崖が見えないように何かで眼をふさいで、それから心安らかに断崖に向ってかけ込んでいくのだ》(L. 166-B. 183)

《Un homme dans un cachot, ne sachant pas si son arrêt est donné, n'ayant plus qu'une heure pour l'apprendre, cette heure suffisant s'il sait qu'il est donné pour le faire évoquer. Il est contre nature qu'il emploie cette heure-là, non à s'informer si l'arrêt est donné, mais à jouer au piquet. […]

一人の男が牢獄にいて、最終判決が下されたかどうかを知らず、それを知るためには一時間しか残っていないが、もし最終判決が下ったことが分ればその一時間で判決取消しをさせるのに充分だとする。彼がその時間を、最終判決が下されたかどうかを確めるために用いないで、ビケ遊びのために用いるのは自然に反する。[…]]》(L. 163-B. 200)

一方、Luis de Granada は、上に引いた文章に続けて次のように述べている。

《Imaginons un homme couché sur un filet défilé, ayant sous lui un puits très profond, fait de tel sorte, que si le filet rompait, soudain il dût tomber dedans ce puits: dis-moi quel serait cet homme, combien craintif et effrayé, et s'il ne donnerait pas tout son bien pour échapper ce péril? Ah misérable, qui ose contre la loi de Dieu perseverer tous les jours en ton péché: comment ne prends-tu garde à ce même danger qui t'es offert à toute heure? Ce filet de ta vie rompant, et toi étant en danger de tomber au puits d'enfer,

es-tu si assuré que de dormir à ton aise, te jouer, et te donner du bon temps, sans que tu penses jamais en cette chose si dangereuse et remplie de tant de périls.

ゆるんだ網の上に男が横になっていて、その下には非常に深い井戸があり、もし網がほどけるとすぐに男は井戸の中に落ち込んでしまうようになっていてと想像してみよう。その男がどのようになるか、どれほど恐怖におののくか、そしてその危険からのがれるために財産のすべてを投げ出さないものか、言ってみたまえ。神の掟にさからって毎日を罪のうちに過しつづける者は、まことに憐れなるかな。今お前が見せられたのと同じ危険に何故心を向けないのか？ お前の生命であるあの網がほどけてしまおうというのに、そしてお前が地獄という井戸に落ち込もうというのに、お前はそんなに安心して、ぐっすり眠ったり、遊んだり、楽しい時を過したりして、あれほど危険で危難に満ちていることがらについてまったく考えないでいられるのか》(op. cit., fol. 102-droite-fol 103-gauche)

すなわち、Pascal が《断崖 précipice》というイメージで表現している、死後の永遠の不幸が、Luis de Granada にあっては《深い井戸 puits très profond》という語で示されており、Pascal の断章では牢獄⁽¹³⁾にいて自分の運命に顧慮することなく、ピケ遊びに興じている男の姿が、Luis de Granada の文章においては、深い井戸の上に張られてほどけはじめている網の上にながら、遊び暮している人間として描き出されているのである。両者におけるイメージの類似性はきわめて大きいと言わねばならない。

Pascal にとっても、Luis de Granada にとっても、人間の最終的な運命は、死後に得

られる永遠の幸福あるいは不幸にあるので、その《永遠》と比較する時、現世における生はほとんど無に等しいと考えられている。この思想が、Pascal の有名な《賭 pari》の論理を生みだすのであるが、このような人生の短さについて、Luis de Granada は、次のように述べている。

《Les jours de l'âge de l'homme sont pour le plus cent ans: mais ceci computé à l'éternité, n'est qu'une goutte d'eau qu'on met avec la mer en conférence: et la raison en est évidente: que si une étoile (qui est plus grande que toute la terre) comparé avec le reste du Ciel, semble si petite, que semblera la vie présente si brève, étant mise en balance avec la future qui jamais n'aura fin? Et si (comme disent les Astrologues) toute la terre comparée au Ciel, n'est qu'un point (à cause que la grandeur inestimable des Cieux la font paraître si petite) que semblera ce souffle si court de vie au prix de l'éternité qui est infini? ce sera rien sans faillir. Car si mille ans devant Dieu sont comme le jour d'hier qui est passé, que seront-ce en sa présence les cent ans limités pour notre vie, sinon un rien?

人間の寿命は多くとも百歳である。しかしこれを永遠に比べるならば、海と比べられた一滴の水にすぎない。その理由は明白である。もしひとつの(地球全体よりも大きな)星が天空の残りの部分と比べられるとあれほど小さく感じられるとすれば、これほど短い人生が、けっして終ることのない未来と比べ計られる時には、どのように感じられるであろうか？ そしてもし(天文学が述べているように)、地球全体も天空に比べられる

ならば一点にすぎない（天空の計りがたい大きさが地球をそれほど小さく見せるのである）とするならば、これほどに短い一息の人生は、無限である永遠と比べて、どのように感じられるであろうか？まさしく無であろう。というも、神の前においては千年も過ぎ去った昨日のようなものであるとすれば、われわれの生命として限られた百年は、無以外の何であろうか？》(ibid., fol 98-gauche)

この Luis de Granada の文章は、Pascal が《悲慘 Misère》の綴りに収めた、次の断章を想起させる。

《Quand je considère la petite durée de ma vie absorbée dans l'éternité précédente et suivante—*memoria hospitis unius dièi praetereuntis*— le petit espace que je remplis et même que je vois abîmé dans l'infini immensité des espaces que j'ignore et qui m'ignorent, je m'éfraie et m'étonne de me voir ici plutôt que là, car il n'y a point de raison pourquoi ici plutôt que là, pourquoi à présent plutôt que lors. Qui m'y a mis? Par l'ordre et la conduite de qui ce lieu et ce temps a(-t) il été destiné à moi?

私が先と後に続く永遠にのみこまれて
いる私の生の短い期間を考える時——
タダ一日トドマレル客ノ想イ出——、私が
占めているこの小さな空間が私の知らぬ
そして私を知らない無限に広大な諸空間
に沈んでいるのを考える時、私は、別の
ところではなくここに私がいることに驚
き身震いがするのである。というも、
なぜ別のところではなくここであるのか、
なぜ別の時ではなく今であるのか、なんの
理由もそこにはないからである。誰が私
をここに置いたのか？ 誰の命令と手に

よって、この場所とこの時が私に定められたのか？》(L. 68-B. 203)

そしてまた、Luis de Granada の文章は、*Pensées* の、先に述べた《考える章》の断章とともに《転換 Transition》の綴りに収められている有名な《二つの無限 Deux infinis》の断章の冒頭部の次のような一節をも連想させるものである。

Que l'homme contemple donc la nature entière dans sa haute et pleine majesté, [...]. Qu'il regarde cette éclatante lumière mise comme une lampe éternelle pour éclairer l'univers, que la terre lui paraisse comme un point au prix du vaste tour que cet astre décrit, [...]

そこで人間に自然全体をその壮麗で充
全な威容のうちに眺めさせたい [...]。
人間に宇宙を照らすための永遠の燈火と
しておかれているあの輝かしい光に眼を
向けさせたい、あの天体が描く巨大な軌
道に比べれば地球が一点のように見える
ようにしたい [...]

いうまでもなく、上に引用した Luis de Granada の《生の短さ》についての断章と《*Pensées*》のいくつかの断章との類似は、もっぱら修辞のレヴェルにとどまっているのであるが、その類似は Pascal の断章が、Luis de Granada の文章に触発されて書かれたという想像を抱かせる性質のものではないだろうか？

3. 《変りやすさ *inconstance*》と《気をまぎらわすこと *divertissement*》 Luis de Granada は、人間存在の不安定性と変りやすさについて、次のように述べている。

《[...] considère l'inconstance de cette vie, et comme jamais elle n'est

en même état: et pour ce dois penser quel est le changement de nos corps, qui ne sont onc en même disposition: et moins le sont nos esprits altérés par divers vagues et tempêtes de passions qui nous troublent à chacune heure. En somme il n'y a rien en homme qui ne soit sujet aux nuances de la fortune, n'étant onc en même être, ains rouant toujours d'un lieu à un autre. Et surtout considère le continuel mouvement de notre vie, puisque nuit et jour elle va et s'égaré de son droit chemin, se gâtant et usant ainsi qu'un accoutrement, et à toute heure faisant ses approches de la mort.

この生の変わりやすさと、そしていかにそれがけっして同じ状態であることがないかについて考察せよ。そのために、けっして同じ体調にあることがないわれわれの身体の変化がいかなるものであるかを、またわれわれを絶えず悩ませている情念のさまざまな風波によってわれわれの精神が変えられていかに同じ状態にとどまっていることが少ないかを、考えねばならない。要するに、人間の裡には運命の変転を蒙らないものはなく、同じ在り方にはけっしてとどまることなく、常に移り変っていくのである。就中、われわれの生活の絶え間ない動きを考察せよ。というのも昼夜をわかつたず、われわれの生活は正しい道から逸れて行き、衣服のようにすりきれほころび、刻々死に近づいていくからである》(op. cit., fol. 93-gauche)

《Quel Prothée changea onc si souvent de figure, comme fait l'homme à toute heure, et à tous propos? ores malade, tantôt sain: à cette fois content, soudain malcontent: ici triste,

là joyeux, en un endroit sage, en l'autre téméraire, ores soupçonneux, tantôt assuré, ores courroucé, et soudain appaisé, il veut, et ne veut pas, et souvent il ne s'entend pas lui-même. En fin ses inconstances sont si grandes et en tel nombre que les accidents et occurrences se lui offrent, chacune le tournant à sa manière. Le passé lui donne peine, le présent le fâche, et l'avenir l'an-goisse. S'il est pauvre, il vit en travail: si riche, il est orgueilleux: s'il perd son bien, il passe le temps en douleur. Quelle lune ou quelles mers sont si sujettes à altération et nuances? La mer ne se meut que par l'assaut des vents: mais l'homme, et au calme, et aux vents sent toujours mutation, orages et tourmentes.

かつてどのようなプロテウスが、あらゆる時あらゆる事で人間がそうするほどにしばしば姿を変えたことがあったか? 病気かと思えばすぐに健康。満足かと思えばたちまち不満。ここでは悲しんでいるのが、あちらでは喜んでい。あるところでは謙譲であるのが、別のところでは不遜、不安な気持かと思えばすぐに安心、怒っているかと思うとたちまち静かになる。欲するかと思えば欲しくなくなり、そしてしばしばは自分自身と争うことになるのだ。結局、人間の変わりやすさはきわめて大きくまた頻繁に見られるのであり、事件や出来事が起る度に、そのひとつひとつが人間を好きな方向に付けてしまうのだ。過去は人間に苦勞を与え、現在人間を不快にさせ、未来は人間を苦しめるのである。貧乏であれば働いて暮し、金持になれば威張りたがる。財産を失なえば、悲しんで時を過す。い

かなる月、いかなる海が、これほど変化し動揺しやすいだろうか？ 海は風が立つ時にしか波立たない。しかし人間は、風のない時でも、風がある時でも、常に変化と激動と動乱を感じているのだ

(ibid., fol. 103-gauche)

人間の《変りやすさ inconstance》についての、Luis de Granada の文章は、《Pensées》の《悲惨 Misère》の綴りに収められていて、《inconstance》という標題をもつ、次のような断章を想起させる。

《Inconstance. Les choses ont diverses qualités et l'âme diverses inclinations, car rien n'est simple de ce qui s'offre à l'âme, et l'âme ne s'offre jamais simple à aucun sujet. De là vient qu'on pleure et qu'on rit d'une même chose.

変りやすさ。物事には多様な性質があり、魂に多様な傾きがある。というのも、魂に与えられるものの何ひとつとして単純なところはなく、魂はいかなる対象にもけって単純なものとして自らを見せることはないからである。そこから人が同じことについて泣いたり笑ったりすることが起る》(L. 54-B. 112)

《On croit toucher des orgues ordinaires en touchant l'homme. Ce sont des orgues à la vérité, mais bizarres, changeantes, variables.

[...] 人間に接触する時、人は普通のオルガンに触れるのだと思う。それは確かにオルガンだが、奇妙で変りやすく不規則なオルガンなのだ。[...]》(L. 55-B. 111)

この二つの断章は、すでに Montaigne の《Essais》の第一巻三八章《いかにわれわれは同じことで泣いたり笑ったりするか Comme

nous pleurons et rions d'une même chose》の一節、同じく第二巻第一章の《われわれの行為の不定なことについて De l'inconstance de nos actions》の一節と、それぞれ対照されており、そこには語句上の一致が多く見出されるので、明らかに影響関係があると思われる。これに対して、Luis de Granada の文章と対照して見ると、影響関係があると言いう程の語句上の一致はないが、両者の間に共通の発想が認められることは否定しえないであろう。しかし、上の Luis de Granada の文章は、Pascal の次の断章により近い内容をもってと思われる。

《Cet homme si affligé de la mort de sa femme et de son fils unique, qui a cette grande querelle qui le tourmente, d'où vient qu'à ce moment il n'est point triste et qu'on le voit si exempt de toutes ces pensées pénibles et inquiétantes? Il ne faut pas s'en étonner. On vient de lui servir une balle et il faut qu'il la rejette à son compagnon. [...]. Comment voulez-vous qu'il pense à ses affaires ayant cette autre affaire à manier? [...] il n'est qu'un homme au bout du compte, c'est-à-dire capable de peu et de beaucoup, de tout et de rien. [...]

自分の妻とひとり息子をなくしてあれほど悲嘆にくれている男が、面倒な訴訟で悩んでいる男が、今はまったく悲しんでおらず、辛くて面倒な考えからはすっかり解放されているのはなぜか？ 驚く必要はない。彼は球をサーヴされたところであって、それを相手に打ち返さねばならないのだ[...]。この新しい事柄を処理しなければならぬ時に、懸案の事柄のことなど考えられるだろうか？ [...] 彼は要するに人間にすぎないのだ、つま

りほとんど何もできないが多くのことができ、すべてのことができるが何もできない人間なのである。[...]》(L. 522-B. 140)

Pascal のこの断章は比較的早い時期に書かれたものであって、《Divertissement 気をまぎらわすこと》という標題をもつ長大な断章の萌芽であろうと推定されるのであるが、Luis de Granada が強調している、人間の《変りやすさ inconstance》が具体的に鮮明なイメージによって描き出されている。ところで、この《変りやすさ inconstance》はまた、人間の動性の表現でもあって、Pascal が、《Divertissement》の断章で強調するのはその点である。《Quand je m'y suis mis quelquefois à considérer les diverses agitations des hommes, et les périls, et les peines où ils exposent dans la Cour, dans la guerre où naissent tant de querelles, de passions, d'entreprises hardies et souvent mauvaises, etc., j'ai dit souvent que tout le malheur des hommes vient d'une seule chose, qui est de ne savoir pas demeurer en repos dans une chambre. 人間たちのさまざまな動きや、宮廷や戦争で彼らが身をさらしている危険や労苦について、またそこから生れてくる多くの争論や情念や大胆でしばしばは失敗に終る目論見などについて時々考えてみた時に、私は人間のすべての不幸はただひとつのこと、部屋のなかに静かにしていることができないことからくるのだ、としばしば言ったものである》(L. 136-B. 139) という一節が示しているのも、あるがままの人間がもつ抑え難い活動性であり、その空しさである。人間にとって《全き休息は死である》(L. 641-B. 129) であり、その本性は《運動 le mouvement》のうちにあるので、現世的諸活動のなかにのみ幸福が

あると考えられているのだが、実はその活動自体に絶対的・最終的価値はないのであって、人間の真の幸福は神を求めることにのみ見出されるとするのが Pascal の思想である。現世的諸活動に熱中することは、とりも直さず現世的価値を求めることに狂奔することであるが、その空しさについて Luis de Granada も次のように述べている。

《[La vie] étant si misérable, on l'a tant chérie, qu'il n'est péril, travail, perte, ni malheur, auquel les hommes ne s'exposent pour elle, et bien souvent ils font des choses, pour lesquels ils perdent la vie éternelle.

生がかくも悲惨であるのに、人はそれをあまりに愛するので、そのために人間たちが身をさらさない危険も、仕事も、敗北も、不幸もないほどであり、しばしば人間たちは永遠の生命をも失ってしまうようなことも行なうのである》(fol. 93-gauche)

この Luis de Granada の思想は、Pascal の人間的諸活動についての考察の根底にある思想であった。

*

前田長太訳『パスカル感想録』に収められている「西班牙パスカルの人生観」の原典についての調査から出発したが、以上のように、Luis de Granada の著作のフランス語訳、《Traité de l'oraison et méditation, trad., par F. de Belleforest》の一部の箇所と、Pascal の《Pensées》のいくつかの断章とに類似点があることが見出されたので紹介を試みてみた。しかし、Pascal が Luis de Granada を読み、そこから影響を受けたのだと主張する意図は筆者にはない。その点に

ついて確実なことが言いうるためには、現在の調査では不充分なのである。従って、両者の間に影響関係があると断言することはできないが、発想の共通性があることは指摘しえたとと思う。

古典のテキストを研究する際に取られる《対照 rapprochement》という手続きは、色色な点でテキスト解明に寄与するところがあるが、なかでもそのテキストの独自性を明確にすることを特に目的とすべきであろう。その意味で、《対照 rapprochement》という手続きによって、獅子が喰われた小羊の総計と見做されてしまう結果におちいることは、厳として避けなければならない。事実、上に引用した Luis de Granada の文章と《Pensées》の断章とを比較するならば、たとえ語句の一致や発想の共通性が認められたとしても、両者の間の距離が無限に近く大きいことは明白であろう。前田長太が、「西班牙バスカルの人生観」について、『氏 [Luis de Granada] の人生観はバスカルのそれに比して聊か皮相の観察たるを免れざれども』と評しているのは、きわめて正鵠を射えていると思う。

Pascal と Luis de Granada との関係に言及したバスカル研究者は、筆者の知る限りでは、(前田長太を除けば) Jean Mesnard 教授だけである。Mesnard 教授は、『彼 [バスカル] の宗教思想の大きな部分が、説教を聴いたり、十七世紀においては誰の書齋にも備えてあった書物、例えばスペインのドミニコ会士 Louis de Grenade の著作を読んだりしての、反省から生れていると考⁽¹⁴⁾えたい』と述べている。筆者が数年前直接教授に伺ったところでは、現在まで Pascal と Luis de Granada との関係について研究したバスカル学者はいないとのことであり、教授自身も着手しておられないとのことであった。いずれにしても、前田長太が Luis de Granada の小篇を『バスカル感想録』に訳載したこと

は、けっして見当ちがいでなかったと言えよう。そして、従来、『Pensées』の人間論的断章はもっぱら Montaigne の《Essais》と対照されてきたのであるが、いわゆる宗教書 Livre de piété のうちにも、Pascal の人間観察と類似の文章が見出されることは、『Pensées』研究に新しい光を投げかけると思われるからである。

特に、『Pensées』前半部を構成する人間論的諸断章が、従来、無神論者に現世の悲惨と空虚を示して神を求めさせる気持を起させるための、一種の計算の上に書かれたとする見方が取られることがあるが、『祈りと黙想の書』という題名をもつ宗教書のなかに、類似の発想をもつ一連の文章があるところから見れば、そのような見方をあまり強調することは当を得ていないと思われるのである。《神なき人間の悲惨》とは、けっして無神論者に対して信仰者が語りかけることがらではなく、信仰者が日々の祈りと黙想のうちにおいて自らに語りかけることがらであったのだ。〔了〕

注

1. 『言語文化』N0. 9, 1972, 一橋大学語学研究室, pp. 87-96.
2. Luis de Granada は、1504 年スペインのグラナダに生れ、ドミニコ会士となり多くの著作を残して、1588 年に没している。その主な著作としては、De officio et moribus Episcoporum. (Lisbona, 1565), Guia de Pecadores (Salamanca, 1570), Libro de la oracion y meditacion. (Salamanca, 1567), Memorial de la vida cristiana. (Salamanca, 1566), Introduccion al Simbolo de la Fe (Salamanca, 1582) などがある。なお、筆者が上記拙稿で、「西班牙バスカルの人生観」の原典を、『Guia de Pecadores』と思ひ誤っ

たのは、同書第一巻第二九章 (Libro I, capitulo XXIX) が問題の小篇ときわめてよく似た部分をもっていたからである。すなわち、この章は九つの節に分かたれているが、その第一節から第七節までは、《現世の悲惨 Miseria del mondo》が説かれており、その構成も、《現世の幸福の短いこと。第一の悲惨。De cuán breve sea la felicidad del mundo. I MISERIA》からはじまり、六つの悲惨が説かれていて、最後には結論が付されているのである。(Biblioteca de autores españoles, 8, Obras del V. P. M. Frey Luis de Granada, tomo 1, Madrid, Real Academia Española, 1945, pp. 111-115.)

また、この《Guia des Pecadores》は慶長四年にいわゆる天草切支丹本のひとつとして、《ぎやどべかどる》の題名のもとに邦訳・出版されているが、われわれが問題にしている部分は、第一篇、第五、《世界と悪の執着に引れて、善の道を恐るゝ人を導く事》に含まれている、《一. 世界の栄花のみじかき事》、《二. 世界の栄花に災おほしといふ事》、《三. 世界の栄花には偽り多き事》の三つの節に対応している(日本古典全集「ぎやどべかどる」下巻、昭2, pp. 42-47)。上記拙論を執筆した際、筆者の頭にはまず、切支丹本『ぎやどべかどる』があり、そのために前田長太訳の小篇の原典について、誤った先入見をもってしまったのである。

それに加えて、前田長太訳がスペイン語原典からではなく、フランス語訳本による重訳のように思われたこと、そしてきわめて自由な抄訳であることなどから、原文との綿密な対照を怠ったことが、筆者の誤りの大きな原因であった。

3. 以下、Luis de Granada のスペイン語テキストとは、Biblioteca de autores

españoles, 8, Obras del V. P. M. Frey Luis de Granada, tomo 2, Madrid, Real Academia Española, 1945, pp. 1-202, DE LA ORACION Y CONSIDERACION. による。なお、この版では題名が《De la oracion y consideracion》となっているが、初版以来通常用いられている題《De la oracion y meditacion》を、本稿では用いることにする。

4. このセクション・ナンバーは、上記の版本が採用している通し番号である。検索に便利であるので、記することにする。

5. 筆者が参照しえたフランス語訳は次の四種類である。

(イ) *Traité de l'oraison et méditation, Vrai chemin et adresse pour acquérir et parvenir à la grâce de Dieu,...*Fait en espagnol par le R. P. F. Louis de Grenade de l'ordre de saint Dominique: et mis en notre vulgaire par F de Belleforest Commigeois, A Paris, chez la veuve Guillaume de la Nouë et Denis de la Nouë, M. DC. VIII. (ロ) *Traité de l'oraison et de la méditation,...* composé en espagnol par le R. P. Louis de Grenade, ... Traduit de nouveau en français, par Mr Girard Conseiller du Roi en ses conseils, A Paris, chez Pierre Le Petit, ... M. D. LXVIII. (ハ) *Traité de l'oraison et de la méditation,...* Nouvelle traduction par l'abbé M. B. Couissinier. Paris, Libraire Poussielque Frères, 1868. (ニ) *Traité d'oraison et considération,...* Traduction nouvelle par M. L'abbé P...Lyon, F. Guyot, 1843.

6. 上記注の(イ)の版本である。

7. 《Pensées》のテキストは *Œuvres complètes de Pascal*, éd. L. Lafuma, Ed. du Seuil, 1963. による。なお、L. は Lafuma 版, B. は Brunschvicg 版の断章番号を示す。

8. cf. Bernard Croquette: *Pascal et Montaigne*, Droz, 1974, pp. 41-42.

9. 本稿における Montaigne の引用は, *Les Essais*, éd. P. Villey-V. L. Saulnier, P. U. F., 1965 により, 訳文はすべて『エセー』原二郎訳(筑摩書房, 世界文学大系 9 A-B)によっている。
10. 前田陽一: 『バスカルの「考へる葦」』(バスカル著・前田陽一訳『サシとの対話』創元社, 昭 23, pp. 119-158)。なお, この所論は, 前田陽一著『バスカル——「考へる葦」の意味するもの』中公新書(昭 43)により詳しく述べられている。
11. F. de Belleforest 訳は, スペイン語原典の忠実な翻訳であり, 問題の《Pour le Mardi au Soir》の構成は次の通りである。
 POUR LE MARDI AU SOIR fol. 92-gauche-fol. 94-droite
 Second traité de la considération des misères de la vie humaine: auquel est déclarée plus amplement la susdite méditation. §. I. fol. 95-gauche-fol. 97-gauche.
 Des misères et conditions de cette vie, et premièrement de la brièveté d'icelle, §. II. fol. 97-gauche-fol. 99-droite.
 Comme notre vie est incertaine. §. III. fol. 99-droite-fol. 101-gauche.
 Combien est fragile notre vie. §. IIII. fol. 101-gauche-fol. 104-gauche.
 Combien est trompeuse notre vie. §. VI. (*sic*) fol. 104-gauche-fol. 105-droite.
 Combien est misérable notre vie. §. VII. fol. 105-gauche-fol. 108-gauche.
 De la dernière des misères de l'homme qui est mort. VIII. fol. 108-gauche-fol. 109-gauche.
 Du fruit qu'on peut recueillir des susdites considérations IX. fol. 109-gauche-fol. 110-droite.
12. Furetière: Dictionnaire Universelle. art. ROSEAU. «Plante marécageuse, dont la feuille se roule comme celle des cannes. Pline dit qu'il y a 29. espèces de *roseaux*...»
13. Luis de Granada も現世を牢獄に例えている。《Et si cette vie est (comme pour vrai elle est) un vallon misérable, une prison de coupables, et un exil de criminels...》(fol 110-gauche)
14. Jean Mesnard: *L'invention chez Pascal*, in *Pascal Présent*, G. de Bussac, Clermont-Ferrand, 1962, p. 48.